

令和元年5月31日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02910

研究課題名(和文) 中国近世東南沿海地域における地方志・碑文・筆記に見出せる記録伝承の社会文化史研究

研究課題名(英文) Socio-cultural history study of record tradition found in local gazetteers, inscriptions and writings in early Modern Southeast China

研究代表者

須江 隆 (SUE, Takashi)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：90297797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究での最大の成果は、中国の東南沿海地域に残存する地方志・碑文・筆記の地域史料としての活用の途を探り、中国当該地域の近世地域史料研究の基盤を形成したことにある。

具体的な研究成果は、浙江の寧波・嘉興・台州地区の地方志の悉皆調査と地域史研究活用に向けた基盤整備、地域史の実態把握に有効な碑文史料の発掘、筆記史料『夷堅志』の地域史研究活用に向けた基盤整備、筆記史料『夷堅志』をめぐる国際的共同研究の基盤形成の4つである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、これまで殆ど未解明であった中国基層社会の論理を如実に物語る地方志・碑文や民間の逸話をリアルに記載した筆記史料『夷堅志』に着目し、それらの地域史研究への活用の基盤を形成できたことにある。

また特に『夷堅志』については、地域史研究へ積極的な活用により、嘗ての中国地域社会における人々の生き生きとした日常性や生活の実態、価値観などが解明される可能性があり、現代を生きる我々が日常生活を見つめ直す上で大いに資する成果が生み出されることが予想される。ここの社会的意義を見出せる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I developed how to use the local gazetteers, inscriptions and writings remaining in the southeast China as regional historical materials, and formed the basis of regional historical materials research in the early modern China.

Specific research results are as follows. 1. I have investigated all local gazetteers in the Ningbo 寧波, Jiaxing 嘉興, and Taizhou 台州 districts of Zhejiang 浙江, and developed a foundation for the use of those historical materials for local history research. 2. I found out the inscriptions effective for grasping the actual condition of the regional history. 3. I developed the foundation for the utilization of Yijian zhi 夷堅志 for local history research. 4. I formed the basis of international joint research on Yijian zhi 夷堅志.

研究分野：中国近世史研究

キーワード：中国近世史 中国東南沿海地域 地域史 地方志 碑文 筆記史料 『夷堅志』 記録伝承

1. 研究開始当初の背景

我が国の中国近世地域史研究は、各地域独自の歴史や文化を発掘して叙述しようとする取り組みには、必ずしも積極的ではなかった。周知の如く、内藤湖南は、その著作『支那論』等の中で、宋代以降の中国社会の特徴として、君主独裁制の発達という点を指摘したが、一方で、地方文化の確立・発展という点にも言及していた。しかしその後、かかる近世観をより発展的に継承した宮崎市定は、近世期を中央集権的文人官僚支配の時代として捉える傾向を強めた。後の研究者に与えたその影響は大きく、地方や地域を論題に冠した研究であっても、殆どが儒教の素養を備えた文人官僚や文人官僚候補生とも言える知識人の視点からのみ考察されることが多かった。そのため、文人官僚や知識人が記した地方志等の叙述は、どれも似たり寄ったりで、それらを活用して描きうる中華帝国の地方・地域像は、どこでも同じ性質や実態しか抽出できないと言われてきた。我が国唯一の地方志に関する史料論的著作を含む、青山定雄の『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』の中でさえも、地方志は地方官が治政の参考に供するため、あるいは自らの治績を記すために編纂したのであり、「中央集権的官僚統治の進展によって南宋時代に地方志が盛行した」と指摘しているほどである。加えて、宮崎の教えを受けた森正夫が1980年代前半に提唱した所謂「地域社会」論からの影響も少なからずあり、単なる「まとまりの場」のモデルの構築や、そこと公的権力との関係の解明に重点を置いた事例研究が量産され、純粋に地域独自の歴史性や地域の意味合いを追究しようとする地域史研究があらわれなかった。要するに、「地域」を標榜していながら、地域史研究にはなっていないという、内外の研究者からの理解を得難い側面を醸成することになってしまったのである。またもう一つの潮流として、斯波義信らに代表される社会経済史の視点から、中国近世社会像を捉えたものもある。確かに都市論や開発論、産業論にしる、一定エリアの社会の実像を詳細に明らかにし得た点は評価に値するが、依然としてその社会の実像が、如何なる現地の文化的裏付けのもとに長期的に形成されてきたのかという、一定エリア独自の社会文化史的背景にまでには考察が及んでいない。

一方国外に目を向けると、1980年代以降の米国では、内藤湖南や青山定雄らの影響を受けたロバート・ハイムズなどを代表とする所謂「ローカル・エリート」に関する研究が急速に盛んとなり、その傾向は着実に、後進に受け継がれている。しかしあくまでも「エリート」に着目した地域史研究であり、地方と中央権力との連関性や文人官僚支配の視点を重視したものであるという点は否めない。

従って以上のような学術的背景から、現行の高等学校の「世界史」の教科書を複数見ても、宋代以降に関わる叙述は、何れも皇帝による集権政治、文治主義、江南の開発や都市経済・商工業の発展といった記述に終始している。勿論それらは、中国近世社会像の一面を示してはいるが、地域性を考慮せずに、地方の社会文化史的独自の展開に関する叙述を含んでいないのは、社会の真の全体像を示したものとはいえない。本研究は、そこに革新を起こし、中国近世社会像の再構築を目指すために、地域史及び社会文化史研究の視点から計画されたものである。

ところで研究代表者は、過去に受領した複数の「科学研究費補助金」により、真の中国近世地域史研究を目指すべく、宋代以降の「祠廟」に関する記録の分析による地域社会構造の解明を端緒として、地域史研究に不可欠な地方志や碑文の史料性と活用法の究明を目指した研究へ、そして更には、宋～清の中国東南沿海地域における地域性と歴史性の解明に向けた研究へと発展させてきた。その過程で、地方志や碑文の叙述には、文人官僚の意思を反映したもののみならず、地域の論理を如実に物語るものも含まれていること、地域独自の伝承で長期的に地方志等に記録されたものが、筆記史料にも掲載されていることなどを発見した。特に南宋の洪邁が編集した『夷堅志』には、彼が地方官として赴任した先が主に浙江・福建であったため、任地で伝聞した逸話で、東南沿海地方の地方志・碑文に記録されているものが多く含まれていることに気づいた。従って、各地の地域性の解明には、地方志・碑文に加え、筆記史料をも含めた言説の比較検討こそが極めて効果的であると確信し、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

広大な中国領域内の各地域には、当然のことながら、歴史的連続性に裏付けられた地域性が存している。例えば、中国東南沿海地域（浙江・福建）は、近年経済的な発展がめざましいが、こうした現実を正確に認識するためには、当該地域が長期にわたって歴史的に形成してきた独自の特質、すなわち地域性の解明が不可欠である。

本研究の目的は、中国東南沿海地域に残存する地方志・碑文・筆記の地域史史料としての活用の途を探り、中国近世地域史料研究の基盤を形成した上で、中国近世の当該地域における社会像を、宋～清の地方志及び碑文と筆記史料とに見出せる長期的に伝承・受容された記録を比較分析することにより、地域史研究の視点から、社会文化史的側面に注目して再構築することにある。かかる研究を通して、当該地域が具有する独自の特質と中国及び東アジア海域で果たしてきた歴史的かつ現代的意義の解明を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者1人と研究分担者2人により、4年次計画で遂行される。

初年度は、各種地方志の史料性を生成論的に解明すべく、悉皆調査に基づいた系統的分析と序跋文の精読・解析を行う。また加えて筆記史料『夷堅志』の地域史研究活用に向けた作業にも着手する。

次年度は、それら作業の継続と、各種地方志に長期的に記録された叙述の抽出及び解析、叙述の史料源を碑文と『夷堅志』等の悉皆調査により突きとめる作業を展開し、各地区の記録・逸話の伝承過程を探る。

3年次目は、前年度までの作業完了と成果発展を目指し、各地区の近世期における社会文化史的独自性を探る。

最終年度は、4年間の成果全体の総合化を図り、近世東南沿海地域の社会文化史的独自性と中国及び東アジア海域で果たしてきた歴史的かつ現代的意義について検討する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

浙江の寧波・嘉興・台州地区の地方志の悉皆調査と地域史研究活用に向けた基盤整備

研究代表者は、中国近世沿海地域のうち、寧波・嘉興・台州地区に着目し、当地の地方志の悉皆調査を実施し、どのような門目・内容の地方志が作成され、残存しているのかを、府・県レベル毎に分類の上、系統的整理を行った。特に台州地区に関しては、『台州経籍志』に見える歴代地方志の抽出及び系統的分析を、『台州地方志提要』等を参照しながら展開した。また、各地方志の原序や清朝考証学者による跋文等も検索・蒐集し、精読・解析する作業を行った。寧波地区の一部地方志については、史料性の解明と地域史研究活用の可能性に言及する成果を論文化して公表した。上記の作業を行うに当たっては、地方志に関わる電子テキストや、清朝考証学者の文集等の関連諸史料を新規購入し、史料検索作業の効率化などを図った。加えて、地方志の史料性を探るために、総志と地方志の関連性も追究し、北宋期に作られた地方志、特に「図経」の名を冠したものは、総志の一部として編纂された可能性が高いことが解明され、その成果を口頭発表した。

一方2名の研究分担者も本研究課題に関連する史料性の解明に資するための研究を展開した。高橋亨は地方志の史料性解明に資するために、比較検討の材料としての総志編纂の背景を探り、その成果を口頭で公にした。渡辺健哉は書誌学的成果を口頭及び論文で公表した。

地域史の実態把握に有効な碑文史料の発掘

研究代表者は、碑文の史料性を探るべく、地域に建てられた奉勅碑文に刻石された列状の分析を行い、同史料が地域の実態把握に有効であることを突きとめ、その成果を論文化して公表した。

筆記史料『夷堅志』の地域史研究活用に向けた基盤整備

研究代表者と2名の研究分担者は、『夷堅志』の地域史研究への活用の便をはかるための打合せや研究作業を継続し、『夷堅志』支甲10巻部分の訳注稿づくりと、各逸話のキーワード・登場人物・時期などの項目の表化作業を進展させた。表については下記のような暫定版が完成し、訳注稿に関わる作業については、『夷堅志』支甲巻1及び巻2の全逸話の読解・分析をほぼ終えるに至った。

暫定版として完成させた表の最初の部分

標題	内容関連キーワード	中心人物	地域	時期	提供者	出典
張相公夫人	道に迷う・幻・不倫 ・貞操観念・交通・宴	銭履道・河中府 尹張相公	京兆・咸陽 ・商州・虢州	皇統年間		支甲巻1

研究代表者は、『夷堅志』所収のフィクションを含む逸話を、如何に中国近世地域史研究に活用するべきかについての成果を、中国史研究者の立場から口頭で発表した。

2名の研究分担者は、『夷堅志』所収の都史市関連、乃至は政治・制度史関連の逸話の比較史的な分析に資するために、元・明時代や日本古代末期に関わる当該分野の成果を論文及び口頭で発表した。

筆記史料『夷堅志』をめぐる国際的共同研究の基盤形成

研究代表者は、筆記史料『夷堅志』に関する、欧米圏の研究者を主とする国際会議に参画し、内外の研究者が直面している諸課題を浮き彫りにした。またその際の議論を踏まえ、同書の史料性に関してや地域史研究の活用に向けた研究成果を学術雑誌に公表した。かくして形成された『夷堅志』研究をめぐる国際的学术交流の潮流は、その後も継続・維持され、国際的共同研究実施に向けた基盤が形成されている。なおそれに関連して、『夷堅志』に関する国際会議での成果を含む欧米圏の研究者との学术交流の意義を、英文で論文化し、今後の『夷堅志』をめぐる国際共同研究に備えた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は、これまで殆ど未解明であった中国基層社会の論理を如実に物語る地方志・碑文や民間の逸話をリアルに記載した筆記史料『夷堅志』に着目し、それらの悉皆調査を経た上で、叙述・刻印された過程・目的をふまえた緻密な解析を施し、新たな社会像の再構築に向けて、中国近世東南沿海地域の独自性を社会文化史的視点から意義づけようとするものであった。かかる史料論的視点を基調とした研究が内外にわたり極めて乏しい状況にあった点に鑑

みれば、ここに本研究の特色が見られる。

本研究では、地方志・碑文の何度も重修されるという特質や、筆記の後世に選集化され受容されるという性質を活かし、長期的かつ悉皆的に調査・分析を行い、系統的な整理を試みようとしたものであった。従って、地方志・碑文・筆記の史料性が明らかにされるのみならず、中国東南沿海地域のどの地区に、如何なる史料が、どれだけ残されたのか、どのような記録や逸話が長期的に伝承されてきたのかが解明され、当該地域の近世中国における社会文化史的側面に関わる独自性・歴史性が抽出される可能性が高まった。そうした研究の基盤が形成された点に本研究の独創性が認められる。

本研究では、地方志・碑文に加え、筆記史料『夷堅志』を中国近世地域史研究に有効活用するための新たな道筋を開拓することにもなった。当該史料有効活用の便宜を内外の研究者にはかれる成果の一部を生み出せたという点で、インパクトのある意義を有す。

(3) 今後の展望

上記(1) で述べた地方志分析に関する成果の中には、未公表のものも多い。順次、学会での口頭発表や論文で公表していく予定である。

上記(1) で述べた筆記史料『夷堅志』に関しては、よりインパクトのある成果を内外に示せる感触が得られた。そのため研究代表者は、今回の研究分担者2名を含むより大きな研究体制による基盤研究(B)「南宋・洪邁『夷堅志』の史的活用に向けた史料性及び全容の解明と情報ツールの構築」を、2019年度から4年間にわたって展開することになった。この研究により、同書の史料性及び全容の解明と、中国近世地域史研究への活用の便をはかるための情報ツールの構築が進展するのみならず、嘗ての中国地域社会における人々の生き生きとした日常性や生活の実態、価値観などが解明され、現代を生きる我々が日常生活を見つめ直す上で、大いに役に立つ成果が生み出される可能性がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

1. SUE, Takashi, The Significance of Disseminating Abroad the Fruits of Japanese Sinology: With Reference to My Own Experiences of Academic Exchange with Euro-Americans, *ACTA ASIATICA*, 117, 査読無, 印刷中, 2019年
2. 渡辺健哉、平泉研究の展開と藤島亥治郎、平泉文化研究年報、19、査読無、pp.19-31、2019年
3. 須江 隆、宋代列状小考 祠廟の賜額・賜号の申請を中心に、桜文論叢、96、査読有、pp.81-96、2018年
4. 高橋 亨、明代天順年間における皇太子教導制度の確立、東洋学報、100 - 1、査読有、pp.69-97、2018年
5. 渡辺健哉、東アジアにおける平泉遺跡群の歴史的な位置づけ、平泉文化研究年報、18、査読無、pp.43-53号、2018年
6. 須江 隆、南宋・洪邁『夷堅志』に関する二つの国際会議と今後の研究の動向、人間科学研究、14、査読有、pp.85-96、2017年
7. 須江 隆、宋代地誌序跋文考(三) 寶慶『四明志』・開慶『四明續志』小考、東北大学東洋史論集、12、査読無、pp.251-280、2016年
8. 高橋 亨、明清に於ける「通鑑」 史書と政治、アジア遊学、198、査読無、pp.22-34、2016年
9. 須江 隆、社会史史料としての『夷堅志』 その魅力と宋代社会史研究への新たな試み、アジア遊学、181、査読無、pp.75-90、2015年

[学会発表](計16件)

1. 須江 隆、中国史研究者から見た洪邁と『夷堅志』、二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「中国古典学の再構築」主催公開シンポジウム「南宋の士大夫・洪邁の学術」、2019年
2. 渡辺健哉、藤島亥治良郎と平泉研究 内包された東アジアの視点、第19回平泉文化フォーラム、2019年
3. 渡辺健哉、元大都形成史研究、南開大学中国史講座、2018年
4. 渡辺健哉、元代的両都巡幸"儀式"、"文献・制度と史実：《元典章》と元代社会"国際学術研討会及2018年中国元史研究会年会、2018年
5. 須江 隆、宋朝総志編纂考、『大元一統志』『大明一統志』比較研究会、2018年
6. WATANABE, Kenya, A New Perspective on the Jingshi dadian: the Yuanshi Quoted by the Yongle dadian, *Jingshi dadian jiben, Compendia for Governing the World: Mirrors for Princes between East and West*, 2018年
7. 高橋 亨、洪武-永樂の間の人材育成・登用策について 洪武期の施策を中心として、2018年度東北史学大会、2018年
8. 高橋 亨、明代中期の朝儀空間研究、2018台日明清史研究交流合宿、2018年
9. 渡辺健哉、平泉文化遺産の歴史的な位置づけ 東部ユーラシアの視点から、第18回平泉文化

フォーラム、2018年

10. 渡辺健哉、《经世大典》研究的現状 元代史料的研究現状和发展、第二屆中日青年學者宋遼西夏金元史研討會、2017年
11. 須江 隆、日本から中国学の成果を発信する意義 欧米圏との学術交流体験を通して、東方学会設立70周年記念シンポジウム、2017年
12. 高橋 亨、『大明一統志』『續資治通鑑綱目』の編纂について、2017年度東北史学会大会、2017年
13. 渡辺健哉、「宗政家」としての常盤大定 東京帝国大学退官後の活動に注目して、佛教史學會第67回学術大会、2016年
14. 渡辺健哉、常盤大定旧蔵資料の調査と研究、日本中国考古学会、2016年
15. 高橋 亨、『大明一統志』纂修の時代背景、『大元一統志』『大明一統志』比較研究会、2016年
16. SUE, Takashi, Rethinking *Yijian zhi* 夷堅志, AAS-in-ASIA Conference, 2015年

〔図書〕(計1件)

1. 渡辺健哉、東北大学出版会、元大都形成史の研究 首都北京の原型、2017年、323頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：渡辺 健哉

ローマ字氏名：(WATANABE, Kenya)

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院文学研究科

職名：専門研究員

研究者番号(8桁)：60419984

研究分担者氏名：高橋 亨

ローマ字氏名：(TAKAHASHI, Toru)

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院文学研究科

職名：専門研究員

研究者番号(8桁)：20712219

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。